

# 第33回 平和体験学習

村は「平和の村宣言」の具現化の取組として、広島市へ中学生を派遣する広島平和体験学習事業を支援しています。8月4日から7日の日程で広島平和体験学習に参加した中学生4名・引率者2名から報告をいただきました。

戦争ってどんなもの？原子爆弾ってなに？広島で何が起きたの？私達日本人が忘れてはいけない過去から、平和な世の中を考える！



原子爆弾の恐ろしさと被害  
占冠中2年 門間 風弥  
私は、原子爆弾の恐ろしさや、被害について報告します。

1945年8月6日午前8時15分、広島の上空600メートルで原子爆弾が爆発しました。その爆発はTNT火薬1万6千キログラムに相当する破壊力だったとされています。爆心地の半径1.5キロメートル以内の範囲は、全壊・全焼し、半径2キロメートル以内では、ほとんどが全壊・全焼しました。

建物と人体に対する被害の原因は、主に熱線と爆風、そして放射線の三つあります。これらは原子爆弾の爆発した瞬間に放出されました。

爆発時に発生した熱線は7千7百度に達し、町を全て焼き尽くしました。火の中で人々はどれだけ辛かったか、とても恐ろしいことだと思います。

爆風は、人々を吹き飛ばし、建物を破壊しました。倒れた建物の下敷きになり圧死した人、窓ガラスが体中に突き刺さった人、強烈な爆風圧により周囲の気圧が下がり眼球が飛び出してしまった人など、残酷な被害に遭われた方は本当に苦しかったと思います。

爆発から1分以内に放出された初期放射線は、爆心地から1キロメートル以内には多くの人を殺し、救助のためには後から来た人にも被害を与えました。また、数ヶ月後、数年後にがんを発症する可能性を高め、それにより死亡する人も多くいました。爆発時だけではなく、その後も人々に苦しみを与えた原子爆弾を私は恐ろしく凶暴なものだと感じました。

爆心地から1.5キロメートルの地点で爆された河本さんは、爆風で何メートル飛ばされたかわからないとおっしゃっていました。また、上半身の多くが焼け固まってしまい、固まった皮を引きちぎることもできなかったといいます。周りのことがはつきりと分かるようになったのは1、2ヶ月経ってからであり、その後に何度も手術をされており、長い間にわたる辛さや苦しみは、とつともないものだったと感じます。河本さんが治療中に訪れた軍人は、治療の手伝いではなく、写真の撮影や傷口の観察のために来ていると聞き、実験道具のような扱いは許されるものではないと思いました。

私は、広島の人がどうなる

かということを考えずに原爆を落とした人をとて残酷だと思いません。しかし、自分の生活を振り返ると、戦争と日常生活という違いはありますが、相手のことを意識できていないと感じることがあり、これからの生活で改善していこうと思えました。そして、世の中のできるだけ多くの人が、相手のことを考え、身勝手な行動をしないようにしていけば、小さな争いが減り、戦争に発展する最悪の事態を避けることができると思えます。

最後に、貴重な体験をさせてくださった占冠村の皆さま、ありがとうございます。

### 広島へ行き

占冠中2年 藤田 遥誠

戦後73年、被爆された方の高齢化が進み、当時の話を聞ける機会はもうなかなかありません。私は、直接話を聞きたいと思いましたが、自分が体験してきたことについてお伝えしたいと思いません。

8月5日、平和記念資料館へ行きました。そこには、核兵器の危険性や広島への歩み、被爆当時の写真や手記と様々なものがありました。特に

資料館で印象に残ったのは高蔵信子さんの詩でした。「くろい くろい雨 大きなつぶの雨 空にむかつて 口を大きくあけました からだ中があつくて あつくて水がほしかったのです」と、私はこれを見たとき「何のことだろう」と思いました。

8月6日は平和記念式典に参加しました。「いいかい子どもたち、お隣さんとは仲が悪けれど、どちらの家にも爆弾が仕掛けてあるし、何かあったらスイッチ一つで爆発させることができる。だから何も起こらないし、心配しないで仲良く暮らさない。」こんな話を堂々と子どもたちに話しますか。爆弾を仕掛ける時点で間違っています。」と話された広島県知事の言葉がとても分かりやすく、「その通りだ」と深く共感しました。

証言者の集いでは、被爆者の河本謙治さんのお話を聞きました。河本さんは被爆当時、左半身に火傷を負い、皮膚が溶けて固まり刃物のようになつたそうです。河本さんの身体は今もやけどの跡があり、足が少しでこぼこになつていました。当時は水が使えず、怪我の治療には水の代わりにキュウリの水分が用い

られ、傷口の洗浄などが行われていたそうです。水を飲むこともできないので、死にそうなくらい喉が渴いたという話を聞き、私は水を簡単に飲めることがどれだけ嬉しいことかを強く感じました。泥や塵、放射能が混ざった雨や水は飲めないのです。平和記念資料館で見た高蔵信子さんの詩は、それでも水がほしくて雨を飲もうとした、辛くて必死で無念な心の叫びの詩なのだと思えます。

広島へ行つて学習してきた私達は、戦争は二度としてはいけない、戦争反対の意見を言い続けなければならないと思いました。

### 広島復興と様々な支援

占冠中2年 伊達 小春

私は、原爆が投下されたときから広島がどのように復興したのかが気になり、「広島がどのように復興したか」を調べることにしました。

まず、私が原爆について知ったことは、1945年8月6日8時15分に広島に落とされたという事でした。被爆した地域は、あらゆるものが壊され、焼かれ、人々は家族と会えなくなったり、火傷や、放射線による病気で苦しむ、

広島はとても大変な思いをしたそうです。私はこのことを具体的に知らなかったため、衝撃を受けました。

そして、私が広島市の「平和記念資料館」で、復興についての資料で一番印象に残ったのは、「広島への歩み」のコーナーに展示されていた「復興」と墨書きされた旗でした。爆心地から100メートルの榎町で被爆し、倒壊した家屋の下敷きになった小原友次郎さん（当時61歳）が、被爆の翌日、復興を願う気持ちを込めて、自宅焼け跡の金庫の上に立てた旗だそうなんです。その字は本当に力強く、本当に心から復興を望んでいるのが感じられました。そのとき、原爆を生きた人たちは、みんな復興を願っていたのだろうと感じました。

被爆後の市民の生活は、本当に悲惨だったそうです。しかし、市民は食糧難、資金難、資料難に苦しめられながらもそれぞれの生活の再建へと立ち向かったそうです。打ちひしがれず、懸命に努力できるのは、本当にすごいことだと思います。そして、被爆から1周年、1946年8月5日に、平和復興市民大会を開催し、犠牲者の霊を慰め、復

興に向けての誓いを新たにしました。復興対策の実施は困難を極めたそうです。

そんな中、広島市の惨状が国内外に伝えられ始めると、戦前に広島からハワイや南北アメリカに移住した人たちははじめ、海外から様々な支援が寄せられたそうです。そして、広島平和記念都市建設法が定められたり、広島カープが誕生したりしたのだと思います。二度と繰り返されないように、原水爆禁止運動もされているそうです。

私は、被爆した人たちの復興に向けての努力が、本当にすごいと思いました。被爆に負けず懸命に活動できるのが、とてもすごいことなのだと感じられて、とても良かったです。今回の学習で広島市の復興について具体的に知ることができ、本当に良かったです。

私は、今回の広島平和体験学習で、平和なことがどれだけ大切かを学びました。これからの生活で、私は、自分が今平和に暮らしていることに感謝し、生活していかねばいけないと思いました。